

2018年度第39回上田女子短期大学総合文化学科公開講座
平成31年2月23日(土) 10:30~12:00
於上田駅前ビル「パレオ」2F会議室

赤松小三郎研究会 小山平六

岩下哲典先生講演会

「幕末の先覚者・上田藩士 赤松小三郎と坂本龍馬」

(司会進行は大橋敦夫教授)

- ・「赤松小三郎と坂本龍馬の国家構想とその死」について考察する講演であった。
- ・国家とは、歴史に添えば、古代国家→中世国家→近世国家→近代国家→現代国家であるが、江戸時代末期は日本人の国家観がぐちゃぐちゃであった。人は日本を出て外国へ行くと「国家」を意識するようだ。例えば、江戸時代末期、漁船が漂流し外国へたどり着いた漂流難民は自分の出所を聞かれ、「大日本国 紀伊の国・・村」と答えている記録がある。漁民が大日本国と言ったのだ。国家を意識したのかもしれない。
- ・歴史ではバランス感覚が大切である。偏狭に陥らないために、考えること。複眼の視座に立ち、ひとつの思想や宗教に囚われないことが大切。
- ・岩下先生は自分の歴史学者としての立場を「全方位歴史学者」と自称されている。
- ・ペリー来航(1853年、嘉永6年)の1年前(1852年)、福岡藩主黒田斉溥(なりひろ)が幕府に建白書を出している。(オランダ風説書、バタフィア総督文書、日蘭通商条約草案(ドンケル・クルチウス)などから海外情勢を把握していたと想像できる。)それには制度改革(御三家を幕政参与に参画させる)、海軍創設、身分制打破(中浜万次郎に海軍創設をまかせる)、雄藩大名(島津斉彬、徳川慶勝)の協力(連合国家構想)を提案。建白書は徳川慶勝の文書から岩下教授が見つけた。結局これらの大名(島津斉彬、黒田斉溥、徳川慶勝)などが一ツ橋派を形成することになる。

- ・ポサドニック号事件（1861年、文久元年）ロシアが対馬に来航し不法占拠。英国にお願いし退去させる。
- ・坂本龍馬の国家構想は断片的に残されている。赤松小三郎のような建白書にまとめられてきめ細かく記述されたものは残されていない。「船中八策」は後世の創作であるし、「新政府綱領」も項目のみである。
- ・新政府の財政担当に起用された三岡八郎であるが、戊辰戦争の戦費は三岡八郎が調達した。
- ・赤松の建白書は上から下まで目配りが行き届いており、明治政府がやろうとしたことが文書になっている。民政に関しては龍馬より赤松のほうがきめ細かい。
- ・勝海舟は江戸城無血開城で有名であるが、実質はそれより以前に山岡鉄舟が静岡の大総督府に出向き、西郷と概略決めてきたものである。幕府側の無血開城の立役者は山岡鉄舟である。
- ・海舟は明治になり著作があるが、そのほとんどが木村摂津守などが書いた資料を編集しただけであるという研究がある。
- ・龍馬が暗殺された理由は赤松の構想が現実味を帯びてきたため。
- ・上田城修復のために10億円の寄付があつたが、その一部を赤松小三郎の文書、図書などの出版事業に振り向けることができれば、「赤松小三郎」の名前が一般の人達に知られることになると思うが。

以上